

しかし次男は胃腸障害のため、諸種の手当もむなしく七月三日死亡した。引揚げを目前に控え慌ただしく火葬に付し弁当箱に納棺して持ち帰ってくれた。

居留民は無蓋車で奉天、錦西を経てコロ島より乗船し昭和二十一年七月二十四日舞鶴港に上陸した。

赤黒く日焼けし乞食姿の親子はこのようにして漸く故郷旭川に辿り着いた。

私は復員後約一年、生家で休養、その後公務員に再就職した。昭和五十四年退職して余生を送っている。去来する思いはあの悲惨な戦争の終末である。

満州からの引揚げに思う

北海道 村山 八代子

昭和八年から東満総省鶏寧密山の満州炭鉱株式会社
に水道、暖房技術員をしていた主人は肺結核のため、一時療養で休職していたが、二十年の八月八日再出勤し間もなく夫は慌ただしく帰ってきた。その顔にただならぬ

ものを感じました。

今日未明会社が機銃掃射でやられた。日ソ戦が始まった。社員全員牡丹江に集合軍隊に所属するようにとの当局の指令あり、家族は急遽安全地帯へ避難するようにと言ってまた会社へ戻った。第二次大戦の最中とはいっても今までは割合のんびりと暮らしていた私共も突然のことで何が何やら考える暇もなく、とにかく身の回りのものをまとめて、といっても生後八か月と五歳、八歳の子供達では衣類どころかオムツその他でやっとです。

不気味な爆音に何も知らない五歳の子は防空壕から飛び出して慌てさせたものです。

人間ショックを受けると米の飯も砂を噛むのと同じ自然味がないということを知りました。勿論当時は電話があるわけでなし、その度に主人の伝言で、女子供は駅まで急ぎ集合とのことで、とりあへず四キロ近くの暑い山道を急いだ。

あのころは会社自治ということもあってどこへ行くにも団体行動であったから或る程度の混乱は免れたと思う。これが現代のような自己主義な世の中ではより多く

の混乱と予想以上の犠牲も或いは出たかもしれない。

小さな駅も方々から集まって来た人々で瞬く間に一杯になった。今でも忘れられないのは使用していた満人が五歳の幼児を背負ってくれ「ジャングイ（使っている主人のこと）いつ帰ってくるんだ」と聞いた、あのときのあの不安そうな顔、声、本人達だってこれから先一体どうなるんだらうと思つたに違いない。再会の約束はしたものの我々でさえ先のこととは判らない。このことが上司にわかつたため「あやしい言動の満人がいたら即、殺すから申し出よー」これにはさすがに緊張の最中でも嫌な気持ちになりました。

いつ出発になるかわからぬ炎天下の広場で待つうち、あれはたしか夜半の十二時頃と思う、突如として駅に向かつてソ連機が青白く点滅をした途端パラパラとハジキ豆をばらまくように機銃掃射、慌てて建物の壁に身を覆せる、伏せる、もうそこで何人かの犠牲者が出て目を覆うような地獄絵図そのものでした。

我が子に限らず小さな子供達はむずかりもせずよくぞ一夜を耐えてくれたと後になってしみじみ思った。漸く

明け方出発となった。勿論客車などあろう筈もなく無蓋車に乗せられ半日ばかりで、一面波という町の学校へひとまず落ち着いた。

食事といつてもその都度、高粱、粟が僅かばかり支給される。それで飢えをしのぐ状態でした。

先にも記しましたが会社の社員たちは軍、県の指令で牡丹江に集結するため各々、住んでいた社宅は自分で火を付けて焼き、会社及び炭山は全部爆破して、直ちに夜半貨車に乗って移動したそうです。進行中山々に紅連の火炎が点々と見えたときは何ともいえない気持ちでしたそうです。

ところが肝心の軍からの指令がいつの間にか途絶えてしまい、仕方なくか、幸いか牡丹江の一步手前の一面波で待機中に、夫と遭遇出来、別れの覚悟をして出てきた私どもも、家族皆一緒になり緊張の中にもホツといたしました。

その後はとにかく南へ南へと避難の行動に移るわけですが、昼は列車が動いても夜は満人の暴動略奪を恐れて貨車はじっと動かない、またその年はいつになく毎日の

豪雨であつたため、上からテントをかぶせるので中は熱気でむれる。その中で仮死状態の病人も出る。

病人を横にするためなお一層つめられる。雨も止み世も明けて一先ず一休み、粟飯にありついたことも……。

昨夜、死んだ筈の婦人が木陰を背にボンヤリ座っていたときは私もビックリした。

とにかく私は何よりも先ずオムツ洗い、どんな泥水でも水があれば有難い、そして草むらにひろげたり、貨車のふちに乾かす、そのみで精一杯、何も考えている暇はない。

やっと牡丹江に着き、又ソロソロと避難行動、縦横びっしりの人、人の波が駅の構内を埋めつくす。どこへ連れていかれるのか……。ところが途中で五歳の次男の靴が抜けて一瞬手を離し靴探しに必死になっていても後からドンドン人に押される。マゴマゴしていれば子供も離れる、ホンの一瞬でしか見えなくなつてしまひ慌てました。

あのときもしはぐれたままになつていたら私達親子も孤児探しの運命に巻き込まれていたのではないかと今思

い出してもゾツとします。

やっと重い足を引きずりながら、ある旅館らしき所に落ち着いたとたん、いきなりソ連の爆撃機が低空したと思つたら爆弾投下、すぐ隣に炸裂したらしくとにかく物凄いい音で、生きた心地もなく乳飲み子が廊下を這つていたのにハツとして抱き寄せたこと等、とても恐ろしくて現場を見るどころではない。

主人の話では線路がぐにゃつとしてもちあがり、ちぎれた人の足がはさまつていたり、体の部分が飛び散る等惨たる有様であつたと言う。

結局そこも危険ということ、夜半十二時頃眠たがる子を連れ街中でみつけた防空壕に入り一睡もしないで世を明かしたが蚊はくるし、のどが乾いても水もなし、よくぞ子供達も黙つてついてきたことと、それまでは苦勞なしに日本人小人(ショウハイ)としてチャホヤされていたのに今改めて思い出しております。

夜汽車の運行は危険のため、動かない、走られない理由の一つには、いつ間にか満人の機関手が身の危険を感じて姿を消してしまひ明け方までじっと待っていないけれ

ばならない。赤子は泣かすな、幼児は騒がすな、皆息を殺しての長い長い夜を待たねばならない。こんな有様で緊張感と一杯のカユでは母乳がでるはずもない、出ない乳房にすがって泣く児、泣かせるまいと無理に胸を押し付け我が子の口をおさえる。

しかも家畜輸送の貨車にギユウギユウ詰めては暑いのか、臭いのか、それさえ感ずるゆとりもない、こんな毎夜を幾日過ごしたか、それさえさだかでない。

漸く着いたのが新京でそこも各方面からの避難民でゴッタ返し我々は駅前の大和ホテル勿論もぬけのからのホテル、そこで知らされたのが前日の八月十五日、日本は降伏したと聞かされたあの時のショック：それは全国民もそうであったかも知れないが…。

社宅を出てから飲まず食わずの十日間、張りつめた気も一遍に抜け、話す気力もない目の前が真っ暗で、信じがたい気持ちでした。

ホテルの大広間で一先ず座ったものの誰も口をきかない、それから又重い足取りで腹のすいたむずかる子を背になあやす気力もないが集団の力に支えられて、市郊外

の興農公社の空き家に身を落ち着けることになった。毎夜、班長らしき人の情報その他の連絡等を受けながら約一年間避難民の生活が引き揚げるまで続くことになった。

なにしろ着の身着のままこれから先厳寒の冬に向かつて先ず着るものの心配、私ではどうすることも出来ない。

主人はいち早く市街の軍官舎に目をつけ空家（情報の早い軍はいち早く家族を日本へ帰すため朝鮮方面へ避難させたらしい）にはいつて家族のため、布団や衣類を物色して力にものをいわせて一抱えも二抱えも運んでくれたため、どうにか冬を過ごすことができましたが、お風呂など一度もはいたことがない、シラミというものにお目にかかったのもこのときからで毎夜シラミとりが日課の一つでした。

新京在住の日本人は家具その他を満人に売り、食いつなげるが我々遠方からの避難民は先ずその日から働かねばならない。夫のいない婦人、子供らは手まきのいかがわしいタバコ売り等から始まって物売り又は満人に逆に

使われる立場になる。

普段無口の主人もいざというときは度胸と行動力にも
のいわせさまざまな商法を考えたり、在京の家の水道ボ
イラーの凍結修理等で僅かのお金をもらって、どうにか
冬を過ごすことが出来ました。

新京郊外は大草原が果てしなく続いています。毎
日々々ソ連へ満州の占領物資が運ばれていく鉄道がいや
でも見えます。今更敗戦の惨めさをみていなければなり
ません。何故なら鉄道の周辺には食の糧とする野草のア
カザが山ほどあるので毎日列車を見ながら子供とともに
野草取りを日課としていたからです。

その折ソ連兵に使役として使われた日本人も、ソ連に
抑留されるのではとの不安から脱走して銃殺され貴い生
命を落とし、折角命からがら避難してきた家族を悲嘆の
ドン底にさせた光景も見ました。

そのうち長男次男次々とハシカにかかり熱は高くても
おいしいものも食べさせてやれない。可哀相に連日の強
行軍の疲れがでたものと思いながら看病する中どうやら
落ちて着いてホッとしましたが、次男の顔がむくみだし青

白くて、太るわけもないのに、きっと腎臓が悪くなった
のかと思って空家の畑のトーキビの毛を盗んで飲ませた
りもしました。あとになりそれは栄養失調のむくみと解
りました。野草のお陰かどうやら元気をとり戻してく
れました。但し生後八か月の三男は連日連夜の疲労と極
度の栄養失調のため、腸を悪くし、なけなしの米でお粥
を作り、医者へも通いましたが、とうとう九月十二日に
その短い一生を終えたのです。

隣人の満人の助けを借りて小さな柩をつくり荷車を借
りて、幼い兄弟にも押させて長い長い陸橋を渡りはるか
彼方の大草原で荼毘にふし泣きながら小さな骨を抱いて
帰ってきました。あの草原に親であろうか、子であろ
うか、毎日毎日運ばれていく柩を乗せた荷車のガラガラ
という音、黙々とゆく人々、あの荷車のきしむ音は今で
も耳について離れません。でも私はまだ我が子の骨を日
本へ持ち帰れたことを喜ばなければなりません。

社宅を出発直前に家族を亡くされた同僚の人たちは集
合間近であったため、泣く泣く庭に埋めてきた方もあり
ました。あの果てしなく広い大曠野の赤い夕日の彼方、

柩の荷車を引いて歩いたあのときの言い知れない悲しき
…戦争の犠牲とは兵士のみではありません。

避難中に敢えなく生命を亡くした者、なんらかの形で
犠牲になった者、この目で見た戦争の悲惨な光景、無惨
さ、本当にもう二度と戦争はあってはならないと思いま
す。

その内に満州、特に新京周辺に中央軍と八路軍の内乱
が起り、日暮れになるとパンパン銃の音、毎夜生きた
心地がしませんでした。幼児のいなくなった私も必死に
なって働き、また僅かの暇をみて長男の（もう二年生に
なっている）教材のない勉強をみてやりながら年も明け
て漸く二十一年の八月に、コロ島から博多行きの輸送船
で懐かしい日本へ帰ることが出来ました。

あれから四十五年、日本の再興とともに必死の努力の
甲斐あって我が家の再建も出来、余生も安穩に暮らせる
毎日を感謝しておりますが、幼くして亡くした三男に朝
晩仏壇に向かって回向するたびに思うことは、いずれ私
もあの世で三男に会って「ゴメンネ…」といって、はじ
めて我が家の戦争が終わるのではないかと思うのです。

奉天の家を追われて

群馬県 山本清子

終戦の年の四月、主人は在郷軍人から応召して八月十
日頃、一時帰宅を許されて帳簿の整理にと自宅に帰って
いた。当時は米穀商をしていて配給所となっていた。大
体の整理をして十四日夕方帰隊して行った。

翌日は終戦で驚いた。七、八人いた日鮮、満人の使用
人は自然姿を見せなくなって自然閉店となる。ラジオは
真の平和が来たのですとニュースの度に言ったので私は
喜んだ。不安な日々を一歳半の長男と過ごしている中に
武装解除の二十日が来た。

町内は異様に殺気立った空気がみなぎって来た。その
夜も自分の家で寝ようと思っていたら、日本の兵士が慌
てて来て、「早くその昭盛国民学校へ避難するよう
に。」それで子供を背負って逃げた。

それから私と子の難民生活が始まった。資本金が約十